

評伝 矢内原忠雄 (五)

A Critical Biography of YANAIHARA Tadao (Part 5)

関口 安義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

第五章 大学生活と住友への就職

一 大学での日々

一九一三(大正二)年十月八日、父謙一の葬儀と初七日を終えた矢内原忠雄は、夜半今治港から宮崎丸で神戸経由、上京の途に着く。「母去り友逝き父またねむる。我 Home は將に天にあらんとす」と彼は日記に記す。神戸では大利武祐の遺品を尋ねて、須磨三の谷の城野氏宅に行くも、何も見出せなかった。結核という病を怖れ、すべて焼き尽くされたという。このことは第四章に、すでに記したところである。忠雄は十一日午前十一時、東京原宿駅着。すぐ

一高卒業後下宿している、堀江峯次郎宅の八畳間に入る。そこは代々木八幡の丘と向いあった、堀江園という植木屋の離れであった。十二日の日記には、「東京の花やかなる街を通る多くの人々、その中を歩むわれは孤客なり」の一文を見出すことができる。

大学の授業には、十三日から出席することになる。忠雄には一ヶ月遅れの始業であった。大学は地方高校出身の学生が多く、一高のような家庭的雰囲気はなかった。彼は孤独が身にしてみる思いであった。十四日の日記に忠雄は、「街に車に人はみてど我は孤独なり。新渡戸先生の御めにかゝり内村先生の御文をよめど我は孤独なり。われの心を慰むるもの、心に触るもの一人もあるなし。われ友にあひて却つて孤独の念をませり」と記している。彼は友人から借りた授業のノート写しに精を出し、寂しさをまぎらわしていた。

東京に戻ってから、彼は再び内村鑑三の集会に顔を出すようにな

る。十月十九日の日曜日は、希布来書^{ヘブライシヨ}十二章のモーセの信仰の話であった。彼は日記に「政治家としてのモーセよりも信仰者としてのモーセ！ その若き時エジプトの財産よりも神のために苦しむ方を選ばれたる彼！ われ／＼青年も亦彼に倣はざるべからず」と記す。二十六日の日曜日はその続きで、モーセの苦しき忍耐を知らされ、忠雄は「われはわが家庭伝道を思ひて実に深き感にうたれき」と日記に書く。忠雄は父の葬儀を終え、上京して以来、不安にさいなまれていた。その最大の不安・気がかりは、キリストを信じることになく死んだ父は、救われないのかという問題であった。二十六日の日曜日に内村鑑三の話を感激をもって聞いた忠雄は、翌日の二十七日夜、意を決して鑑三を訪問し、直接この問題を問うている。後年の「内村鑑三」¹と題された文章で、忠雄はこの日のことを回想している。それは以下のようなものである。

先生は在宅してゐられて、すぐに会つて下さつた。私が来意を告げると、だまつて聞いてゐた先生は唯一語、「おれにも、わからんよ」と強く言ひ切られ、頬をふくらませ、驚のやうな眼を窓の方に向けられた。そのまま沈黙の中に数秒が過ぎた。致し方なく私は立ち上り、うやうやしく先生の前にお辞儀をして、辞去しようとした。その時先生が呼び止めて、言葉をやらげ、そのやうな問題は、私自身が長く信仰生活をつづけて居れば、いつのまにか、わかるともなく自然に解決のつくものであること。わからない問題が起つても、私自身の信仰の歩みをすててはいけないことを、さとされた。

戸外に出た私の心に、大きな驚きと落胆があつた。「先生に

でも、わからない事がある！」之は私にとりて、驚くべき発見であつた。かうして先生は私の眼を、直接手にひき向けて下さつたのである。この時先生が、いろいろの方面から言葉をつくして説明を試みて下さつたとしても、わたしの心を満足させるやうな明快な解答は得られなかつたに違ひない。「おれにも、わからんよ」の一言は、数百言の説明にまさつて、私に善き解決の道を示されたものであつた。

「教師としての内村先生」²にも同様のことが記されている。そこには「先生曰く、僕にもわからない。祈れ。又曰く、かくの如き問題は急ぎ込んで解決を求むべからず、信仰生活を長く継続して行く間に自然に微妙なる解決が与へらるゝものなり」とある。また、当日の日記にもこの日、鑑三宅を訪問したことが、文語調で記されている。「おれにも、わからんよ」のきわめて率直なことが、重々しい顔からぼとりと一言洩れた時、忠雄は「数百言の説明にまさつて、私に善き解決の道を示された」と言う。この日を通して忠雄の内村鑑三への傾斜は、いっそう強まるのであつた。それは生涯を通じてのものとなる。

内村鑑三は、忠雄の生涯を通しての真に偉大な師であつた。矢内原忠雄を考えることは、その師内村鑑三を考えることでもあるのだ。『矢内原忠雄全集』第二十八巻には、幸い一九二三（大正）年の日記が全て収録されている。先にも記したが、「忠雄日記」は明治四十四年（全集表記に従う。以下同じ）にはじまり、同四十五年・大正二年までがあり、後は断続し大正九・十年の留学日記、昭和四・十二・十七・二十一・二十二が収録されているに過ぎない。元よ

り日記は他者に見せるものではない。それゆえプライベートの問題を考慮すると、時効を待つほかに年代の日記もあり、現状では、公表されている部分のみで考えるしかないのである。が、幸いにも一九一三年の日記は見る事ができる。矢内原忠雄の若き日の信仰を考えるに貴重な、第一次資料である。

矢内原伊作は「大正二年秋から冬にかけての日記は、父を失った悲しみに加えて、信仰そのものの弱さを嘆く悲観の調子に満ちている」というが、十月一日に父を失って後、十二月三十一日迄の記述を読むと、その感は深い。忠雄は孤独であった。特に大学の授業を聞き始めた十月の終わりの頃がひどかった。「父の死にあひては母の死の時よりも切実に孤独の念を抱き来りぬ」(一九一三・一〇・二二)、「教室でノートしながらでも卒然として父のことが思ひ出され胸がせまることがある」(一九一三・一〇・二四)、「神が父を愛して居られたにしても、父はエホバをしらなかつた故、その救は半分しかない様である。あゝしかし、正直謙遜にして愛ふかき父！ 僕のためしひは彼の救を要求してやまない」(一九一三・一〇・二五)などの文面を日記に見出すことができる。言うまでもなく「彼」とは、父矢内原謙一のことである。

忠雄が父の救いについての悩みを内村鑑三に打ち明け、指導を乞うたのは、前述のようにこの年十月二十七日、月曜日の夜のことであった。十一月二日の日曜日には、例のごとく柏木の内村鑑三の講話を聴きに行く。当日の日記には、「こゝへ来る人はみな罪人なることを認めたる者なるべし」との御言葉うれし。あゝわれ神との間遠ざかれり、これ罪の大なるもの、罪人のかしらなり」と書く。十一月五日の日記には、「昼食は高木、江原、三谷の諸兄と共であつ

たが、其時僕は特別にさびしくあつた。僕の心はうすぐらくて光がない。父のことばかり思はれて涙が出る。信仰の火も殆んど燃えて居ない様な気がする」とある。高木とは高木八尺、江原とは江原萬里、三谷とは三谷隆正で、三人とも柏会の先輩であつた。

忠雄は父謙一を心から慕い、尊敬していた。繰り返すが、当時においても多くの青年は父に反抗し、父を否定して自我を確立していったことに較べると大変な違いである。忠雄は父を心から偉大な存在として受け入れていた。このことは若き矢内原忠雄を語る場合、特筆してよいことなのである。幼い時に父を失ったのなら理解できる。が、彼はすでに二十歳、成年に達していた。それなのに彼は、少し前に死んだ父を回想し、父を恋うた。

孤独をかみしめる中での内村鑑三の集会は、忠雄の唯一の安息の場となる。カリスマタ(恩寵)についての講義のあつた十一月九日、日曜日の日記から引こう。

今日は何たるたふとき安息日なりしぞや。余の今日の暗誦は路加伝十三章始めの「イエスマタ人の恒に祈禱して気おとすまじき為め」語られし比喩なりき。されど余は余の生活の working として Sunday-Christianity (日曜だけの意) 的なを嘆くの心切なりき。内村先生の御祈り！ あゝ先生はわれのために祈り給へり。先生はわれらの内外にある罪に対する戦いと神によりての勝利とを祈られ、殊に青年の信仰生活の為に祈られ、われらの親戚、われらの兄、われらの弟にして未だ主のみ名を知らず世の事のみ思ひわづらへるもの多し、願くは神の大なる恩恵もて我等を導き給はんことを、またわれらを何なりとも其

の御用に使ひたまはんことを祈りたまひき。お話はコリント前書カリスマタ(恩寵)の話。

十一月になって、彼の精神はやや落ちつく。十三日には彼の代々木の下宿、植木屋の堀江園で、集まりをもっている。その日の日記には、「今日来た人は本名、宇佐美、大野、金沢、市毛、沢田の六名、一たん僕の室へ来てから、原へ出て池のはたで暮れ行く西の空を前にし、昇り行く月を背にして讚美歌をうたつた」とある。が、空しさは失せない。その日の日記の最後に彼は、「僕の最も感じたのは聖霊の力といふことである。僕の今は甚だ空虚である、生命がない、生命とは聖霊の臨むことである。必ずしも活動を意味しない。静かに生きてゆくのも亦力である。しかして此の力、——聖霊は交際によつても得られぬ、ただ真の祈りによつて得らる」との感想が記されている。

翌十一月十四日の日記には、「僕も純粹にたのしきは聖書を読む(心もて)ことであらう。聖書をよむのが大儀な時は純粹に生きてゐるのでない」とある。二十一日の日記には、またまた「われ此の数日父を恋ひ父をかなしみて日を過せり。余の周囲の人々余の心を知らず。われ独り無限の憂愁を湛へて而も此の人々と接す。あゝわが願をいはず即ち一切の交友と絶ちて山水の間に放浪して以てわが悲しみに泣かんこと也」と書いている。忠雄の悲しみは尋常でない。父を思う気持ちは、間歇泉のように湧き上がる。十一月二十六日の日記には、「突如として父を思ふ。父の病苦を思ふ、而して暗然たり」とある。また、十二月一日の日記には、「われ電車の中にて誕生えし人の新聞よむに相対す。この人亦やがては死ぬべし。苦

しみて死ぬるべし。すべての人は死す、死するためには生く。あゝ、死の恐怖、ものすごき無慈悲なる死、母を奪ひ友を掠め父を取りし死! / あゝ、われは生れ来ざりせば幸なりしならんを」と書きつける。実に悲痛な感慨である。母松枝の死、友人大利武祐の死、そして苦しんで死んだ父を思うにつけ、彼は神のなさる業の非情さに考へ至る。矢内原忠雄が若くして死の問題に真剣に立ち向かつたのは、意味のあることだった。死を突き詰めて考えることで、はじめに生の意味が分かるからである。

やり切れない思いの中で、彼はバックル(Henry Thomas Buckle)の大著『イギリス文明史』を読む。「Buckleの英国文明史をよみかく。われこれよりは名著をよまん」(一九一三・一二・六)とか、「夜バックルをよみて十二時に至る」(一九一三・一二・七)、「バックルをよんだ」(一九一三・一二・一七)、「バックルを読みなす」(一九一三・一二・二〇)といった記事を日記に散見する。同じ頃、故郷の兄安昌と弟啓太郎が腸チフスで富田村の避病院に隔離される。「あゝ、わが家にはなほ不幸の加はり足らざりしなるか、いかなればか、かくは打ちつゞきて苦しめらるるやらん」の感想が日記(一九一三・一二・八)に認められる。彼は祈ることも出来ず、「忍びて神の恵なりと之を受くるほどの信は今の余にはなし」(一九一三・一二・九)とも記している。苦しい日々が続く。

この年十二月十二日、夏目漱石が一高弁論部に来て、「模倣と独立」と題して講演をした。当日は大雨であった。忠雄は放課後、東京帝大の隣の一高へ聴きに行った。当日の日記には、「放課後高等学校へ夏目漱石先生の演説をきき、に行く、聴衆多し。InitiationとIndependenceとに關するお話にて大へん面白かりき。先生のお顔

の黒いのに驚いた」とある。忠雄は同世代青年同様、漱石の作品を大抵読んでいたので、講演は興味をもって聴いたのである。漱石は「インデペンデント」を重視すべきことを説きながら、「イミテーション」の意義を否定しない。この二つは、「存在すべき理由があつて存在して居る」のであるとした。そして「両面を持つて居なければ、私は人間とは云はれないと思ふ」と語った。それは人間に対する深い洞察力を伴った講演であった。

十二月十四日の日記には、「わが心は淋しきなり。家に残れる兄弟だちの心はなほも淋しかるらん。この冬休み家にかへらんと決心す」とある。彼は家族思いでもあつた。年末は富田村の避病院で兄安昌と弟啓太郎の看病に当たつた。これまで『矢内原忠雄全集』第二十八巻収録の日記（一九二三（大正二）年）を紹介する形で、忠雄の大学一年生時代を追つてみた。全集収録日記は、以後飛んで一九二〇（大正九）年のヨーロッパ留学時代のものになる。それゆえ残りの大学生活の日記は、見ることができない。そこで第一次資料としての日記がある場合は、できるだけそれを紹介することに務めた次第である。

忠雄の大学生活は父の死にはじまった。父の死は、父思い・家族思いの忠雄にとって、やり切れない現実であつた。その中で彼は努力するほかなかつた。大学の入学式には参列できず、授業がはじまっても、最初の一ヶ月間は出席できなかつた。彼が授業に出ることができたのは、前述のように、この年十月十三日、月曜日からのことであつた。

当時の東京帝国大学法科大学には、小野塚喜平次・新渡戸稲造・土方寧^{（おの）}・上杉慎吉・高野岩三郎らに新進の欧米留学を終えた吉野

作造らに加わつた時期であつた。忠雄は新渡戸から植民政策やアドム・スミスの『国富論』などを教わる。忠雄の『私の歩んできた道』^①は、大塚久雄らを聞き手とした、極めてユニークな対話集だが、東京帝国大学法科大学時代を述べた箇所では、忠雄は、「大学の先生方の講義の中で一番僕に影響を与えたのは、新渡戸先生の植民政策と、吉野作造先生の政治史だつた。吉野先生は、近世民本主義の発達とかいふ題目で、今でいえばデモクラシーですね、その民本主義の発達の講義をやられた。政治史の講義のうち一回は、この欧州立憲政治の発達とか、民本主義の発達とかだつたが、もう一回は具体的な問題について論ぜられて、メキシコの革命について講義された。これは非常におもしろかつたですね。つまり、アメリカの、まあ今でいえば帝国主義、アメリカの帝国主義に対して、メキシコの革命が戦つたというか、そんな問題についての興味は、ずいぶん先生から影響うけていますね」と回想している。

吉野作造は大正デモクラシーに理論的根拠を与えた人として知られる。当時三十五歳の少壮助教授であつた。彼は一八七八（明治一二年）一月二十九日の生まれなので、忠雄の十五歳年長となる。忠雄が東大に入学した一九一三（大正二）年九月、吉野は欧米留学から帰国したばかりで、『中央公論』に盛んに論陣を張るようになる。また、授業にも熱心に当たつた。吉野にとつて三年間の留学後の授業は、新鮮だつたに違いない。吉野は「民本主義の発達の講義」によく準備して臨んだ。そうでなければ優秀な学生を惹きつけることはできない。吉野が忠雄在学中の一九一六（大正五）年一月号の『中央公論』に載せた、「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」^②は、民衆の利益と意向を汲んで主権は運用されるものである

ことを説いたもので、論壇に大きな反響を巻き起こす。それはロシアとの戦争を経て、次第に高まってきた日本の民衆のデモクラシー運動に、理論的な方向付けを与えることになる。

他方、新渡戸稲造の植民政策の講義は、忠雄の「新渡戸先生の学問と講義」によると、以下のようである。

『農業本論』出版の年、先生は病氣療養のため米国に渡り、彼地にて英文で『武士道』を著述した(明治三十年)。病氣軽快の後、先生は台湾総督府技師、京都帝国大学教授、第一高等学校校長を歴任、大正二年東京帝国大学法科大学専任教授となり、植民政策講座を担当された。私はその年東大に入学し、一年の時は先生からセリグマンの経済原論、二年の時はスミスの国富論の原書講読を受け、四年の時(筆者注、当時の東大法科大学は、四年制であった)に植民政策の講義を聴いた。セリグマンには各章の初めに多くの参考書が挙げてあったが、先生は「これは読んだ」「これは読まない」と言って、読まれたものについてはその概要の説明や印象を話された。読書家であった先生は書物のことをよく知っておられ、書物に対する興味をわれわれの心に喚び起された。

先生の講義に対しては毀誉褒貶さまざまであって、ひどくつまらないという学生もあれば、甚だおもしろいという者もあった。つまらないという批評は、理論がなく、体系的でなくて、雑談のようだというのであり、これに反しておもしろいというのは、生き生きとした人間味が豊かであり、片言隻句の中にも暗

示に富んだ知識や批判があるというのであった。私などは「甚だおもしろい」と思った学生の一人であって、法科大学四年間の講義の中、私の生涯の形成に最も大きな影響を残したものは、先生の植民政策と吉野作造教授の政治史であった。

いつも温容溢れる先生が、ある日の講義で、台湾の佐久間総督が、山中に隔離して平穩に生活している蕃社を討伐したことに触れた時、俄かに講壇の卓を拳固でたたき、色をなして憤慨、激昂された時の身のしまるような印象が、今もって忘れられない。

矢内原忠雄の大学時代は、すぐれた師に恵まれ、研究の基礎となる考えや方法を学んだことになる。また、学外では内村鑑三の柏木の集会和、鑑三を指導者として仰ぐ柏会と共にあった。大学在学中忠雄は、月に一回開かれる柏会に出席、諸先輩の信仰談に接して、大きな影響を受けるのであった。彼が柏会に入会したのは、一高二年生の時であるが、以後、彼は柏会と共に歩んだ。前章でもふれたが、そこには先輩の鶴見祐輔・前田多門・藤井武・黒崎幸吉・塚本虎二・三谷隆正・川西實三・高木八尺・江原萬里らがあり、当初、忠雄は一番若い会員であった。同じように鑑三を指導者として仰ぐ坂田祐(なす)・南原繁・松本実三・石田三治・高谷道男らの白雨会には、これも前章でふれたが、忠雄は加わっていない。ちなみに白雨会とは『旧約聖書』詩篇の六十五篇「神の恩恵なる白雨(しろあめ)」によるという。内村をめぐるサークルには、早く『聖書之研究』の読者よって結成された教友会という会があった。こちらは忠雄たちより年齢的に少し上の天野貞祐・落合太郎・大賀一郎・小山内薫・倉橋惣

三、そして志賀直哉らが会員であつたが、忠雄との接点はない。

柏会と並行して忠雄は、一九一四（大正三年）には柏会メンバーの多い読書会にも参加し、報告をしている。こちらはさまざまな本の感想・意見を述べ合う会である。また、出身校の一高の弁論部では、東大在学中もしばしば演説している。彼の大学生活の一面は、一高時代のまさに延長として存在したかのようだ。在学中の一九一四（大正三年）七月、ヨーロッパでは第一次世界大戦がはじまつた。

二 新居浜、別子銅山

一九一七（大正六年）三月、矢内原忠雄は東京帝国大学法科大学政治学科を卒業した。同じ東京帝国大学でも、文科大学の履修期間は三年であつた。それゆえ芥川龍之介や成瀬正一や久米正雄は、一九一六（大正五年）年七月十日の日付で卒業していた。が、法科大学の修学年次も制度が変わり、新规定では四月入学、卒業期限は三年と決められた。その移行措置に伴い、忠雄らの学年の卒業は、七月ではなく繰り上がって三月となる。つまり矢内原忠雄は、制度改正の結果、三年半の在学で法科大学を卒業できるようになつたことになる。同じ帝国大学でも、京都帝国大学法科大学は、早く新规定を採用していた。そこで一高一年生の時、南寮十番で忠雄と寝起きを共にした恒藤恭は、一九一六年七月に卒業している。ただし旧規定も生きており、翌年七月の卒業者も結構いた。忠雄と一高基督教青年会の仲間で京大法科に進んだ長崎太郎は、旧規定での卒業を選んでいる。そのことは『官報』（第一四九〇号、一九一七・七・一九）で確

認できる。

大学三年生のころから、忠雄は卒業後のことを考えるようになっていた。卒業したら朝鮮へ行きたい、朝鮮の人々のために働き、伝道したいというのが、彼の夢であつた。一九一六（大正五年）年一月二十七日の日付のある「十字架を負ふの決心」という文章で、忠雄は卒業後のことに関して、次のように言う。

僕は漫然朝鮮へ行かうかと思つて居た、寺内伯が韓国統監となつたのは未だ僕が中学に居た頃であつた。僕は寺内と諱名されて居た。僕は朝鮮総督になつたら愉快だらうと思つた。併し基督を知りし今はそんな考はもう残つて居らぬ、それから朝鮮のことも暫く忘れられて居た。然るに大学卒業後如何にこの身を用ふべきやうを考へるに至りて朝鮮は再び思ひ出された、高等学校の時新渡戸先生から我国財政に関する憂国の情を伝えられて財政を以てこの国を救はんと思つて居た、今でもさう思はないではない、併し財政は僕の氣質にふさはしくない傾きが無いでもない、それで色々考へて居るうちに此の国を救はんといふ考の代りに斯民を愛せんといふ考が浮んで来た、それは朝鮮人であつた。前には日本帝国の殖民地たる朝鮮半島の統治を思つて居たのであつたが今度は人類同胞として国滅びて山河残れる朝鮮人の姿が思ひ浮べられたのである。「われ朝鮮人のためにこの身を捧げんか」と思つて来たのである。一体僕は父上も母様も既にこの世を去られて居る、僕は学校を卒業しても喜んで下さる両親は居られない、併しそれだけ又自由行動の範囲も広い、僕の身は「捧げる」のには最も適当な境遇に居る。「何

の爲めにこの身を捧げんか」「朝鮮人の爲めに」。併し僕はかく考へて直に朝鮮に行きて何を爲さんか、官吏となるのが可いであらうか実業家となればよいであらうかといふ心に心を向けた。それで二月十六日の面会日で新渡戸先生に「真に朝鮮人の爲に尽すのには如何なることをしたらよいでせうか」とお尋ねした。先生は長大息せられて日本人の外国人殊に支那人朝鮮人等に対する態度の誤れることを慨嘆せられた。紐育のミリオネアーの未亡人が東洋觀光の途次非律賓まで行つた処土人の憐むべき状を目撃して直ちに旅行を中止して帰国し紐育の邸宅を閉し教員と看護婦数名を率ゐて再び非律賓に渡り、氣候の悪い暑い処へ行つて小さい家に不自由な生活をしつつ土人の爲めに尽して居ることを話され、日本人にして朝鮮人に対してかゝる事をなしたる人ありしやと言はれた。先生はこれ基督教を知れるものと知らざるものとの差異なることを言外に示された。僕は日本人に対しても朝鮮人に対しても最もその爲に尽す道は基督教だと思つて居る。伝道、教育は僕の最も之に当らんことを願ふものである。併し僕は卒業後直に伝道界や教育界に身を投ぜんとするだけの確信は今はない。さしあたり官吏たるべきか実業家たるべきかといふ事のみを思つて居た。或人は朝鮮人の爲につくすには官吏となり国家の力を借りて事を爲すのが一番有効だと言つてくれた、併し僕は決してさう思はぬ。又ある人は朝鮮へ行つて自ら事業を起せば愉快だらうと言つてくれた、しかしそれは僕の志ではない。僕はキリストの力を借りるこそ最も朝鮮人の爲につくす所以だと確信して居る。しかし現実の問題としてさしづめ如何なる職業を取るべきかと、第二義の問題

ばかり思つて居たのであつた。

長い引用になつたので、この辺で控えるが、矢内原忠雄は大学を卒業したら朝鮮で働くことを願つていたのである。彼が朝鮮で働くことを思い立つたのは、一高時代の満州旅行の帰途、朝鮮を縦断して帰国した際、「朝鮮鉄道の車窓より秃山陋屋の間に入出する白衣長管の朝鮮人がまたわが眼前に彷彿として来た」ことにあつたと右の文の終わりに彼は記している。日本の植民地時代の貧しい朝鮮、そこに住む人々への同情が、彼を朝鮮の地で働くという夢に駆りたてていたのである。

が、現実はきびしいことに思い当たる。彼は右の文章で「僕は学校を卒業しても喜んで下さる両親は居られない、併しそれだけ又自由行動の範囲も広い」と書いてはいるが、実際には家の重荷を負わねばならぬ立場にいたのである。父の死後、忠雄の兄安昌が家を継ぐとは、子息の矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』が詳細に伝える。一部を引用するなら、「定職をもつてなかつた安昌は、父から遺された財産によつて何かをしようとしていろいろの事業に手を出したが、人が好いたために瞞されたりして成功しなかつた。「このぶんでは家は遠からず傾くだろう」というのが祖母の歎きであり、親戚たちは安昌を非難した」という。安昌の人の好きは、父矢内原謙一譲りなのである。が、父が瞞されながらも人を助け、家を護つたのに対し、安昌は故郷の家に安住することを好まず、東京か大阪に出ることを望んでいた。『矢内原忠雄伝』の記述によると、安昌は忠雄が卒業前年の秋に、京都の清水寺の麓に家を借り、旅館経営を考えて

いたという。忠雄はその家に兄を訪ねている。

忠雄に「就職に就て」という文章がある。文末の「十月九日」という記述は、一九一六（大正五）年十月九日のことである。三箇所を紹介する。

○僕の就職如何は家の都合を前提とする。兄貴の都合によつて僕は故郷に帰ることを辞せない、否むしろ望んで居る、静かな田舎、父母の住み給ひし故郷に帰つてシムブルライフを送るのは僕の最も願ふ処である、僕は綿服で帽子も被らずに出ある様な生活がすきだ。絹物を着たり赤いネクタイを巻いたりするのは大きらい、僕はみんなの様に金持になりたいとか贅沢な生活がしたいとか紅茶をのまうとかオークの椅子が欲しいとかは思はぬ、僕は頭を屈せざる（神さまに対しての外は）シンブルな生活がしたい。稲田見わたす限りの故郷に帰つて半分百姓をし半分読書して暮すのは如何にたのしいであらうか。お祖母様の晩年をいたはり弟の勉強を助けつつ暮すのは如何に愉快であらうか。

○しかし兄貴が家に居るとすれば僕は家に帰つて厄介になるわけに行かぬ、わが生まれし家に住まざれば今治へ帰つて仕事するのも既にわが希望の大半を殺ぐことになる、僕はどこかへ行つて生活を立てて行かねばならぬ。それは今迄も度々書いた朝鮮である、元来僕は朝鮮人をかはいさうに思つて居る。人として彼等に接し彼等の友となつて行きたい。僕と朝鮮人とが友となることは日本と朝鮮とが真の友人となる事の一部分である。政權と武力とのみでは到底朝鮮人を心服させることは出来

ぬ、愛である。僕は愛の心を抱いて朝鮮へ行きたい。朝鮮で僕のやりたい事は朝鮮の青年と耶蘇に於て交ることである。私立の小さい学校を起して真の教育をやりたい。それから又真面目な雑誌を発行して朝鮮人のために口を供し又朝鮮人のために口とならうと思ふ。旗幟はキリスト教、目的は朝鮮人を愛し日鮮の溝を埋めること、事業は学校と雑誌、之れ僕の志望である。

○国へも帰らず又何かの理由（お祖母様の不承諾等）で朝鮮へも行かぬ事となれば住友へ行つてやらう。格別住友へ行きたくてたまらぬ事はないが鈴木馬左也氏（筆者注、住友本店総理事）は士を待つに礼ある人だといふ事、黒崎（幸吉）、江原（萬里）、松本三兄の既に在らるる事、煙害問題以来故郷に関係深きこと、阪神の地はなつかしき地にて世話になりたる大利及増井おばさまを慰め得らるること、啓太郎を神戸中学へやれる事など種々の理由で住友といふことにした。

矢内原忠雄は卒業を前に、進路を三つに絞つたのであった。一つは郷里今治で農業に従事し、家を護ること。第二は朝鮮で教育に携わり、日鮮の溝を埋めること。第三は住友に就職し、故郷今治に近い新居浜の別子銅山に勤務することである。新居浜なら神戸にも近い。大利武祐の義母や初恋の女性増井艶子の母を慰めることも、弟啓太郎を名門神戸一中へもやることも出来るなど、メリットが想定された。結局、彼はこの第三の道を歩むこととなる。住友の採用試験は、一九一六（大正五）年十一月二十八日に行われた。

忠雄に「採用試験」という文章がある。文末に印された十二月十四日の日付は、一九一六年のことと思われる。忠雄は文章が実にな

まい。「採用試験」も例に漏れず、二人の面接官との問答は、的確な表現で読ませるものをもつ。四坂島の煙害への意見も堂々と述べ、別子銅山へ行きたいという手近な理由を、次のように述べている。

「私の家は都合あつて兄が別家して居ますので家には老人の祖母と幼き弟妹とが居るのみです、それで私がお世話をしたのでありますが何分田舎の老人ですから立木と同様にその土地を離れることができません。それでなるべく近い別子か新居浜かに居ることにすれば大に都合よい事と思ふのです。尚第二の理由としては今度私の先輩の黒崎さんがあそこへ赴任せられました、私はあの人の下で実業界の第一歩を練習するのは望ましい事と思ふからです」

「君はどうして住友を選んだのですか」

「一ばん耳に熟して居たからです」

「是非鉾山でなくてはならぬといふのですか」

「いやそれはどこでも構ひません」

矢内原忠雄はこのような面接試験を突破し、内定通知をもらう。当時住友は、三井・三菱に次ぐ日本の三大財閥の一つとして知られるようになっていた。住友は第一次世界大戦中から戦後にかけて、発展した商社であった。住友は貿易・金融などで大きく伸び、海外にも販売店や銀行を置くようになる。中国の上海や武漢（漢口）には、住友洋行や住友銀行の支店が一九一六（大正五）年の秋から翌年一月にかけて、相次いで開店されていた。それは矢内原忠雄が就

職を希望し、面接試験に臨んだ時期に重なる。

住友財閥の基礎となったのは、愛媛県の別子銅山の開発であり、その利益で住友は大きくふくらむ。それ故、発展中の大財閥の住友に勤めるのは、世間の人々の羨望の的であった。が、忠雄は住友に就職し、銅山に近い新居浜に赴くのは、家族のためであつて、立身出世のためとは少しも思っていない。それゆえ「君は住友へ行くさうだね」と問われるのを嫌った。「消息 三月十三日 江原兄へ返書」という文章にそのことが記されている。住友には先輩江原萬里が大阪に、黒崎幸吉が新居浜に勤務していた。この文章の終わりに方へ忠雄は、「小生住友へ行くと思ひても何等の愉快起らず、唯貴兄の許へ行くと思へば実にうれしく候。「君は住友へ行くさうだね」と言はれてしかみ面致す小生も「君は江原君の処へ行くさうだね」と言はる時は笑顔を致居候。住友家を助けに行くやら貴兄を助けにゆくやら一寸わからず候。小生或は新居浜行きと相成るやも知れず、その時は黒崎兄を助けに行くこととなる故いづれにしても喜び居り候」と書きつけている。かくて一九一七（大正六）年三月、矢内原忠雄は東京帝国大学法科大学政治学科を卒業、住友総本店に入社し、四月から別子鉾業所に勤務した。

住友財閥の基礎を築いた別子銅山は、愛媛県新居浜市の山麓部に存在する。銅山は一六九〇（元禄三）年に発見され、翌年から一九七三（昭和四八）年に完全閉山されるまで二八三年間に、七十万トンの銅を産出したという。別子銅山は日本の近代化に寄与する一方、煙害その他の公害問題も生んでいる。二〇一一（平成二三）年九月二十七日、わたしは新居浜市を訪れ、別子銅山記念館をはじめとする各所をめぐった。早朝六時に新大阪駅を発ち、岡山經由JR

予讚線で新居浜入りした。例の如くまず市役所へ行き、新居浜に關するさまざまなパンフレットをもらう。『にいほま紀行』という立派な冊子や『愛媛・新居浜』と題した地図付き案内書、それに『旧別子案内図』や『別子銅山記念館案内』などである。

新居浜市は四国の北部のほぼ中央部、瀬戸内海の燧灘ひろなだに面し、東は四国中央市、西は西条市、南は四国山地を境として高知県に接する。街の中央を四国山脈を源とする国領川の清流が流れる。かつては別子銅山で栄え、人口も一九七〇（昭和四五）年には十二万六千九百九十二人を数え、一九八一（昭和五六）年には過去最高の十三万五千三百九十六人を記録したが、鉾山の閉鎖もあって、以後減少の傾向をたどり、かつては松山に次ぐ県内第二位だったのが、平成の市町村大合併により、今治市にその地位を奪われる。

矢内原忠雄はこの町の別子銅山に勤務し、月給四十円を手にすることになる。住友には新居浜だけでも各地に社宅が存在した。採鉾本部のあった東平とうなるには、作業員の家族の住む東平社宅その他があった。市役所で貰った資料の一つ「あかがねの里東平」によると、「東平地域には柳谷、唐谷からたに、一本松、第三、喜三谷きざや、三坂すべりざか、東平、呉木、尾端おぼなの集落があり、その住居のほとんどが社宅でした。大正十四（一九二五）年の記録によると、東平には八三五戸あり三六四九人が住んでいました」とある。

矢内原忠雄の住んだ社宅は、事務労働者向けのもので、新居浜の海岸沿いの西部、現在の住友化学株式会社愛媛工場歴史資料館近くの地であった。地名を惣開そうひらく（現、惣開町）という。住友化学株式会社愛媛工場歴史資料館は、旧住友銀行新居浜支店の建物を改修したもので、国の登録有形文化財に指定されている。惣開の社宅は、肉

体労働に従う人々の住む山寄りの社宅とは異なり、街中の平地の便利な所にあった。勤務先には近い。また、当時は住友家事業の従事者とその家族の診療に限られた新居浜住友病院（住友別子病院、現在は一般市民にも開放された総合病院となっている）もあった。予讚線はまだ全線開業していなかったものの、新居浜駅にも歩いていける距離である。故郷今治にも近い。

住友別子鉾業所での矢内原忠雄の当初の部署は、経理課であった。会計を担当するところである。後年の歌人山下陸奥は当時を回想し、「矢内原君の部署は経理課で、課長は黒崎幸吉氏だった。黒崎氏三十歳前後、矢内原君二十五歳であった。私は二ヶ月ほど遅れて赴任したが、矢内原君は帳簿統計などを実習し計算の部にいた。ここで私と机を並べたが、同君はたどたどしい手つきで算盤を一生懸命はじいていた。まもなく東平とうなるという現場にゆき、泥まみれになつて坑内で一ヶ月余り実習し、帰ると調査部に坐つた。ここは起案の審査と予算を製作する重要な部署であった」と記している。住友別子鉾業所時代の矢内原忠雄を語った貴重な証言である。

少々解説が必要である。住友財閥の基礎を築いた事業が別子銅山にあったことは、これまでも何度もふれてきた。別子銅山に關しては、今はインターネット上の情報でも簡単に調べられる。しかし、現地に行き、歩かないとわからないことも多い。わたしは足を棒にして現地を歩き回つた。今はやりの万歩計というなら、二万五千歩近くを歩き、各所をめぐつた。むしろ広い地域のこと故、タクシーにも乗つた。その際頼りにしたのは、市役所でもらつた各種の資料であった。

矢内原忠雄が三年間勤務した別子銅山は、今は閉山となり、往事

の盛況ぶりは、資料と現地調査によって知るほかない。別子銅山を知るのに手っ取り早い方法は、まずは別子銅山記念館に行くことだ。わたしも市役所からタクシーで記念館に直行した。記念館は市の南部、平野部が山岳部に入る道路の左端、山根地区にある。はじめわたしは、ここは市立の記念館(博物館)かと思っただが、予期に反して住友グループの協力によって一九七五(昭和五〇)年に設立されたものであった。館員の方の説明によると、ここはかつて別子銅山で働いていた労働者のための住宅や厚生施設があった地であるという。今はそれらはすべてなく、跡地の一角は整備された総合運動公園となっている。

別子銅山記念館は実によく出来た博物館であり、展示は歴史コーナー、地質・鉱床コーナー、生活・風俗コーナー、技術コーナーなどに別れ、展示のそれぞれには、適切な説明が添えられている。記念館を見学した後、銅山跡を見て歩くには、それなりの時間が必要だが、一日あれば十分である。こうした資料や現地見学を通しての歴史にふれると、先の山下陸奥の想い出の一文も生きてくる。

忠雄はいわゆるホワイト・カラーとして住友に採用されたのであった。発展途上の住友では、東京帝国大学法科大学出身のエリートを将来の幹部として期待したのであろう。それゆえ最初は経理部で会計を学ばせ、また、現場がどういうものかを東平の作業場その他で一ヶ月余り体験させ、戻るや調査部という会社の心臓部に迎えたのである。東平の作業現場は危険なところであり、忠雄も廃坑道で足を踏みはずし、下に落ちそうになるという危うい経験もしている。が、実習は楽しかったようである。別子銅山は住友財閥の宝庫であったが、採鉱現場には厳しい現実があった。そうした中で忠雄

は、貴重な人生の体験を得たのである。子息の矢内原伊作は、父忠雄の新居浜時代を総括し、次のように言う。¹²⁾

この三年間で養われた点も多いと思われる。しかし彼が別子銅山に勤務して得たのは、たんに事務的能力だけではなかった。彼はここで資本主義社会の生きた姿に身をもって接し、たんに理論的ではなく、実家の眼をもって社会を見ることを学んだのである。大正六年から九年にかけては、わが国の資本主義が急激に膨張した時期、またそれにもなつて労働運動が急速に活発化した時期、米騒動やストライキが頻発した時期である。その時代の流れを彼は中央から離れた四国の田舎町にあつて外から眺めると同時に、それ自身が日本の近代資本主義社会の縮図である別子銅山にあつて、時代の流れを実際家として内側から体験したのだった。

的確な指摘である。このことは一高基督教青年会で一緒だった長崎太郎などにも言えることだ。彼は後年京都市立美術大学(現、京都市立芸術大学)初代学長となり、優れた人材を育てることになるが、当初は船舶会社の一社員であった。長崎太郎は旧規定により一九一七(大正六)年七月、京都帝国大学法科大学政治学科を卒業すると、まず日本郵船株式会社に八月一日付で入社し、横浜支店を経て一九二〇(大正九)年二月以降、ニューヨーク支店に勤務、四年半の海外生活を経て、旧制武蔵高等学校教授として教育界へ転進した。ニューヨーク時代にはウィリアム・ブレイクの著作や版画を集めまくり、後年、日本のブレイクコレクターとしても知られるよう

になる。長崎太郎が教育界転進を決意したのは、一九二二（大正一二年）一月二日、ニューヨークで、矢内原忠雄と再会したことによる。その経緯は後章で詳しく述べることにする。

三 結婚と伝道

一九一七（大正六）年四月、住友総本店に入社し、別子鉱業所に勤務した矢内原忠雄は、同年五月二十二日、一高・東大の先輩で、内村鑑三の柏会でも先輩に当たる藤井武の妻喬子の妹、西永愛子と結婚する。間に入ったのは、川西實三であった。藤井武は妻の実家から妹の愛子の結婚相手を探すよう頼まれており、矢内原忠雄を候補者にあげ、親友の川西實三に仲介を依頼したのである。が、忠雄は当初この話を断っている。忠雄の「或る相談」というエッセイには、「幸福な家庭に育ち美しき性情を有して来られたその人が祖母と兄と而して貧弱なる僕との家庭に來られて苦勞せられるのが氣毒である。幸福なる境遇の人は幸福なる境遇の人に嫁するのがよからうと思ふ。第二の理由は到底僕は未だ一家を成すだけの資力が無い。而も細君の家から補助を仰ぐ程の不見識はしたくない」との理由であった。この文章が書かれたのは、一九一六（大正五）年十二月十四日のことである。ところが、その一ヶ月と十日余たった一九一七（大正六）一月二十八日に書かれたエッセイ「或る相談の後」¹⁹には、この申し入れを受け入れる方向のことが書かれている。直接本文を引用しよう。

ところが去る二十四日の夕方フー／＼火鉢の火を起して居る時藤井さんが自ら訪ねて下さった。四方八方の話もまどろしく僕から話の口を切つた、藤井さんから一通りのお話があつた。僕は考へて居た事をすつかり述べた。第一にこの僕を目標にせられたといふのは柏木へ行つて居るからであらうと思ふが、余の信仰は極めて微弱にて人を愛せんと欲しつゝ愛する能はずわが家に未だ福音入らずわが心に未だ聖靈溢れず、誠に神様に対し又先生に対して面目なき身である事を述べた。余の眼はうるんだ。次に家庭の事情を物語りて父母の逝去より兄の事に至る迄かなり詳しく述べた。余の涙は溢れ胸は痛んだ。余は兄の事は之れ迄誰にも語らなかつた、しかし今の場合は之を語らずには居れない場合である。大抵の人に対してなら之を語らずして直ちに断つてしまふのであるが、藤井さんに対してはさういふわけには行かぬ、且つ藤井さんになら之を話しても嘲り笑ふことなく却つて祈つて下さると思つたから心おきなく語ることが出来たのである。しかし藤井さんに対してでも一度話せと言はれたら余は之に應ずることは出来ない。第三には経済上の事情を説き弟の学資のことなど話した。第四には祖母や文姉様の希望を述べた。斯くの如きのわれ、斯くの如きの家、斯くの如きの経済状態であるがそれでも構はぬ可愛い娘をやる、又それでも構はぬ行くと仰有るなら之は神様の与へ給ふ処と思ふから謹み且つ喜んでお受けしますと余はきつぱり言つた。

矢内原忠雄は結婚の相手が尊敬する藤井武の妻喬子の妹であること、しかも、相手方は自分を直接名指して川西實三に斡旋をしたこ

とを知るに及んで、反対する理由はないと思うようになった。忠雄はむしろ積極的にこの結婚話に立ち向かう。右の文章の続きには、「余は尊敬措く能はざる先輩藤井兄に対して出来るだけの礼をつくして言ふべき事の程を言つてしまつたから胸がさつぱりした。あとは神様の御取計ひ一つ、僕は何も心を労することはなくなつた」とある。すべては神の御意次第であるという信仰が、結婚に際しても、忠雄の考えを支配していた。彼は西永愛子との結婚話を良縁と思うようになった。しかし、それが実現する、しないは神の御意如何である、人間の意思を越えた世界があることを彼は知っていた。神の計らいは、いかに良縁と思われてもダメな時はダメ、逆にいかなる困難があろうとも、神の善しとしたことは必ず成るとの考えである。

忠雄の子息矢内原伊作によれば、西永愛子は「金沢の石川県立第二高等女学校を卒業後、一時は上京して藤井武夫妻のもとに寄寓しながら実践高等女学校専攻科に通っていたが、その後金沢の家に戻っていた。ふとり気味で色白の、明るくて快活な、苦勞知らずの令嬢だった」という。縁談話は順調に進み、これも矢内原伊作によると、忠雄は二月二十三日の夜、相手の西永愛子抜きに藤井武の家で、愛子の叔母原幾代立ち会いの下、正式に婚約している。相手と直接会うこともない婚約式であった。写真ぐらいは見たものと思われる。

今日の常識からすると、相手と直接会うことも話をすることもなく結婚を決めるというのは、理解しがたい。が、当時はそれが普通であったようだ。例えば一高基督教青年会で親しく交わつた長崎太郎は、その頃（一九一六年二月二八日）結婚しているが、父の勧めの

縁談話に従つて、相手の女性大久保美和を、「一度も見もしないで嫁にもらいました」と言うし、同じく一高同期で文科の成瀬正一は、父の決めた川崎造船所副社長川崎芳太郎の娘福子と、忠雄や長崎太郎同様、一度も会うことなく結婚に同意している。一高南寮十番で一緒だった恒藤恭（当時井川恭）は、話のあつた女性、恒藤まさを紹介された時、彼女の顔を正視出来ず、白い手と足もただけを見て結婚を決めている。そういえば、これまた一高同期の菊池寛とて同じようなものだ。菊池は同じ頃、「写真を見ただけで現在の妻と結婚した」（半自叙伝）と書いている。それでも皆うまくいっているのである。仲人が双方の家庭から当人の性格までを、よく調べての縁結びであつたからなのである。例に挙げた人々の妻は、みなよき伴侶として夫と生涯を共にしている。前述のように、矢内原忠雄と西永愛子の結婚式は、一九一七年（天正六年）五月二十二日に行われた。忠雄二十四歳、愛子十八歳であつた。

新居浜で新家庭をもつた矢内原忠雄の日々は、充実していた。彼は若い妻を愛し、日々会社の業務を熱心にこなした。さらに彼は忙しい中、同志と計つてキリスト教伝道のための集会を始め、キリスト教入門にかかわる本まで書く。忠雄の「私は如何にして基督信者となつたか」には、以下のように記されている。

当時新居浜には黒崎幸吉兄が私の上役として居られました。

私共は五、六人で家庭集会を始めました。私は所謂『柏木の温室』を出まして、自分で聖書を学び且つ人に伝えることになつたのであります。勤務先の同僚は毎日のやうに基督教に關し辛辣な批評や質問を浴びせかけました。私は之に答へる必要があ

ると思ひました。又私の親戚や兄弟たちに対しても本気に基督教の福音を証明する義務があると感じました。その頃鋳業所は日曜も休日でなく、毎日の勤務時間も長くありましたが、右の答弁及び説明に代へるために私は帰宅後筆を執り始めました。一脚の椅子もテーブルも有たなかつた私は、部屋の隅に置いた古机の前に坐して夜晩く迄書き綴りました。かうして出来たのが『基督者の信仰』の原稿であります。

すでに何度か名を出している黒崎幸吉は、一八八六（明治一九）年五月二日、山形県鶴岡市の生まれ。忠雄とは七歳の年齢差があり、一高・東大の先輩であると同時に、内村鑑三の聖書研究会の先輩でもあった。一九一一年（明治四四）年、東京帝国大学法科大学を卒業し、住友総本店（大阪）勤務を経て別子鋳業所に勤務した。黒崎は後年、熱心な無教会主義の伝道者となるが、その基盤はすでに柏会の頃から養われていた。別子鋳業所時代には、家庭集会を開き、伝道にも熱心であった。黒崎の後年の回想に、「矢内原君はこんな四国の山奥に来られるのは勿体ない人物と思ひましたので、私は「君の様な秀才がどうしてこんな所に来たんだ」と言つて質問しました処「自分は郷里（今治市）に近いのと君が居るから」と云う至極アッサリしたお答えでありました。天下の秀才であり乍ら当時の大学生に特有の此の世的栄達の野心などは露程も見ることが出来ませんでした」というのがある。当時の矢内原忠雄を的確に語るものだ。

また、黒崎は自宅での聖書集会について、「恩恵の回顧」と題した自伝的文章の中で、次のように書いている。¹⁹

新居浜は当時小さい町であり、住友鋳業所の事務所は惣開そうびらきといふところがあり、新居浜町の西の海岸地帯であった。そこにも小さい工場があつたけれども、大部分は事務所や病院や役員役員の社宅であつた。役員の中には多くの技師もいるので、大学出身の人々の数も非常に多く高工程度の出身者は一層多かつた。それに皆近隣に住んでおり、会社への通勤も数分しかかからず、事務所も午後四時には正確に閉鎖するので、私にとつては時間の余裕があり、聖書の勉強をするのに全く好都合であつた。（中略）

そうしたところが、不思議なことには私のところの集会は次第に人数がふえ、いつも二十人から三十人位の人が集まるようになった。クリスマスなどの時は、家族が集まり六十何人かの祝会があつた時の写真などが残っている。そして集会の人々は皆近くに住んでいるので、集会以外にも親しい主に在る交わりをもつことができて、まことに美しいコノニアが出来上つた。これは都会地では、容易に実現し得ない幸福な環境であつた。

忠雄は新居浜で黒崎幸吉の自宅での家庭集会に参加する。黒崎は出張が多かつたので、忠雄が代わりに聖書講義をすることもあつた。右に引用した忠雄の文章に『基督者の信仰』の原稿のことが出て来るが、先にも一部引用した歌人山下陸奥の「新居浜時代のことなど」²⁰には、家庭集会と『基督者の信仰』に関して、次のように回想されている。

その頃、黒崎先生宅で基督教の集会が始まつたが、先生は出

張がちだったので矢内原君が多く話した。以前から基督教の集會はあったがそういう人も殆ど黒崎氏宅に集まった。その人たちが折々牧師を招いたが、両氏はこだわらなく出席された。暫くすると矢内原君は『基督者の信仰』という本を書いて謄写版で百部ほど作り人々に配ったが、私どもも手伝った。この書は後に内村鑑三先生の序文を得て本式に刊行されたが、同君の最初の著書として意義の深いものである。

この時期、一九一九(大正八)年二月十一日に、矢内原忠雄はブレマス兄弟団の松本勇治から洗礼を受けている。ブレマス兄弟団とは、一八八八(明治二一)年来日し、自給伝道をはじめたハーバート・ジョージ・ブランド (Brand, Herbert George) の起こしたキリスト教新教の一派をさす。松本勇治はその日本での団体、キリスト同信会のメンバーに属する。ブランドは、教会組織を設けずに伝道に励んだ指導者だった。黒崎幸吉は大阪の住友総本社にいたころブランドの弟子、松本勇治と知り合い、互いの信仰に共鳴していた。教会という制度に縛られず、聖書研究を重んじる無教会主義と松本のキリスト同信会の信仰とは、一脈通じるものがあつたのである。黒崎は新居浜での家庭集會の講師に松本を誘うことがしばしばであつた。

忠雄の受洗の時は、黒崎幸吉や忠雄の妻愛子・妹悦子も一緒だった。無教会主義では、洗礼はじめ教会の諸典礼には重きを置かず、信仰のみ義とする。が、洗礼を受け、一応教会に属しながら無教会主義に立つケースも、かなりあつた。黒崎幸吉も矢内原忠雄も、パウロによる洗礼の勧め、「わたしたちは洗礼によってキリストと共に

に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです」(ローマの信徒への手紙) 6・4)に問題を感ぜなかつたし、また、周囲の人々につまづきを与えないためにも、一般の教会の手続きを踏んで受洗したようである。なお、詳細きわまりない「年譜」(『矢内原忠雄全集』第二十九巻収録)には、忠雄受洗の記事は見られない。

黒崎幸吉と矢内原忠雄の洗礼に関する記事は、『日本キリスト教歴史大事典』(教文館、一九八八・二、項目執筆藤尾正人)の「キリスト同信会」の項目に、「黒崎幸吉・矢内原忠雄に授洗した松本勇治ら数多くの伝道者が生れ、日本各地で集會がもたれた」との記事を見出すことができる。また、黒崎家の家庭集會に関しては、黒崎自身の回想のほか、松尾逸郎の『「基督者の信仰」出版のころ』²⁾に言及がある。そこには「この集會には時にブレマス兄弟団の独立運動者、松本勇治氏が神戸から出張して話しをされたこともあつた。黒崎先生はお仕事の関係から出張が多く集會に出られないことがあつたが、そこへ、矢内原先生が着任され、黒崎先生の助手として聖書講義を担当されるようになって集會は一段と強みを加えた。こうして先生が後に「新居浜にある神の教会」と呼ばれたこの集會は、福音伝道の新風を此の地にもたらすとともに、この時代に掲げられた光が今も全国の各地に保たれているのである」とある。

新居浜時代の矢内原忠雄の生活は、充実したものであつた。仕事と伝道に忠雄は熱心に当たつた。当初、数名ではじまつた集會は次第に人数を増して行つた。忠雄は懸案の家族伝道にも熱心で、妻愛子のみならず、今治の松木の家³⁾にいた妹悦子、さらには京都から新

居浜の住友肥料製造所（現、住友化学）に勤務するようになった兄安昌まで、信仰に導くことに成功する。矢内原伊作によると、以後安昌は弟忠雄と生涯信仰を共にしたという。²⁰

ついでながら、矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』の三四四ページには、「大正八年、新居浜住友病院でのキリスト教集会会員。前列中央が矢内原忠雄、その右が中川順助院長」の説明書きのある写真が載っている。男性は忠雄と中川院長、それに医師らしき人と学生服を着込んだ人の四名、他は白衣の看護婦十五名が写っている。新居浜住友病院（現、住友別子病院）は、一八八三（明治一六）年別子山村に住友家事業の従業者とその家族の診療を目的として開設された病院で、当時は杜宅に近い惣開町にあった。こうした写真が存在することからすると、忠雄は新居浜住友病院の従業員、特に若い看護婦たちへの伝道も行っていたのであろうか。写真の説明には、「新居浜住友病院でのキリスト教集会会員」とある。

『矢内原忠雄全集』を丹念にめくっていたら、「私の伝道生涯」²¹の「第一回 新居浜の思ひ出」に短いながら病院伝道のことが出ていた。引用すると、「家庭集会の」集まりでは黒崎さんが聖書の講義をしたが、同君は課長（当時は「主任」と呼んでゐた）の地位にあつたから、出張が時々あり、その時は私が代つて講義した。／だんだん集会の人数もふえ、更に住友病院で看護婦さんたちへの伝道集會が始められ、黒崎さん多忙のため、それには私が行つた」とある。家庭集會と病院伝道が、忠雄の新居浜での伝道の二本柱であつたことになる。

四 処女作『基督者の信仰』

先にも述べたが、新居浜時代の矢内原忠雄は、伝道のために小冊子『基督者の信仰』を書き、新居浜のキリスト教集会で配つてゐる。矢内原忠雄初の著作物、いわゆる処女出版であつた。この著作が生まれたいわれに関しては、先に「私は如何にして基督信者となつたか」を引用しておいたが、ここには忠雄の別の回想、右に引用した「私の伝道生涯」の「第一回 新居浜の思ひ出」の続きの箇所²²に以下のように記されているので、こちらの回想に聞こう。

新居浜では、集りの外に、私の最初の著述の思ひ出がある。私の勤務先である鉱業所経理課に、Kといふ東京商大出のすこぶる頭のよい先輩が居て、仕事の合間に、キリスト教についてしんらつな質問をあげて来た。机を並べて居る他の同僚たちも議論に参加して、私に質問を集中した。

同僚たちの質問攻めに答へて居る間に、私は私の信仰弁明を秩序立てて書き記し、ガリ版ずりにして読んでもらうと考へた。同時に、それを私の兄弟や親戚たちに対する伝道にも使用しよう、と考へた。

かうして出来たのが、『基督者の信仰』の原稿である。

『基督者の信仰』は、矢内原忠雄二十八歳の時の著作。原著は謄写版刷り、四百字詰原稿用紙にして、一六枚ほどの小冊子である。その後何度も改訂が施され、現在は『矢内原忠雄全集』第十四

巻に収録されている。テキストの底本は、一粒社刊行の改定第四版（二九三七・一〇）である。本来は謄写版刷りの初版でその内容を見るべきものながら、初版披見は無理なので、ここでは全集本収録テキストによって、その内容を見ていきたい。まずは「序」の部分を示そう。

序 文

内村鑑三

序 黒崎幸吉

序 愛媛県新居浜町に在る教友一同

第三版序 矢内原忠雄

改訂第四版序 著 者

謄写版刷りの原著は、復刻版のない現在、参照できない。ついでに書誌に関してふれるなら、一九二二（大正一〇）年七月刊の聖書研究社版は、忠雄の勤務した東大経済学部にて、一九三三（昭和八）年四月刊のこひつじ社版は東京神学大学図書館と東京目黒の今井館資料館にある。全集が底本とした一粒社刊行の改定第四版は東大教養学部（駒場）図書館が所蔵する。一粒社版の「序文」で内村鑑三は、「君の信奉する基督教は近代人の歓迎する所謂基督教に非ず、即ち社会奉仕教に非ず、倫理的福音に非ず、文化運動に非ず、労働運動に非ず、古い旧い十字架の贖罪教である、近代人には時代遅れの迷信として目せられ、彼等の賤視め又排斥する所となる者である」と書いている。

本書誕生までのいきさつは、すでに前節に山下陸奥の「新居浜時代のこと」を引いて説明したが、「謄写版で百部ほど作り人々に配つ

た」という。それが本格的な書物になったことについては、松尾逸郎の『基督者の信仰』出版のころ²⁵にくわしい。関連箇所を引用する。

大正九年十月、先生がイギリスに留学されたあと、わたしはちはこの原稿を纏め出版したいと思ひ黒崎先生に相談してご賛成を得た。

たまたま、わたしが栃木県的那須温泉に行った時に内村鑑三先生の聖書講習会が開かれていた。わたしは聖書研究社の出版の仕事をしておられた山岸壬五氏に、出版上の智慧をかりるためにこの事を話したところ、やがて内村先生のお耳に入った。先生は深い関心を寄せられて原稿に目をとおされ、ご自身の序文を冠して聖書研究社で出版して下さることになった。留学中の矢内原先生には、あらかじめロンドン宛、出版の意向を願ひ出たところ、「主のために幾分にも御用にたてば」とのご承諾を戴いた。

こうして先生の最初の著書『基督者の信仰』は、内村、黒崎両先生と新居浜教友一同による三つの序文を付して出版されたが、わたしの記憶では五百部前後印刷し、やがて品切れとなつてしまった。

なお、忠雄の「私の伝道生涯」の「第一回 新居浜の思ひ出」には、忠雄自身の本書誕生に関する言及がある。そこには「私はロンドンに居て、新居浜教友から出版についての同意を求められ、承諾の旨返事ただけで、自分では何もせず、万事教友と黒崎さんと内

村先生の愛によつてこの書物は出版された。だから、初版本には私の序文もない。出版後、聖書研究社から印税五十円を私の留守宅に送つて下さつたことを家人から知らして来た時、私は先生の物堅いのに感動した」とある。「序」に続く本書の目次は、次のようである。

- 第一章 主イエス・キリスト
- 第二章 聖書
- 第三章 基督教と西洋
- 第四章 基督教と教会
- 第五章 贖罪
- 第六章 復活
- 第七章 再臨
- 第八章 信者の生涯

では、以下に本書の内容を全集本文（一粒社刊行の改定第四版）に見ることにする。「第一章 主イエス・キリスト」は、原稿用紙にして約十二枚。「今を去ること約千九百年前ユダヤの国ベツレヘムにてイエスと名づけられし一人の嬰兒（あなご）が生れた」の一文をもつて書き起こされる。続いて「彼の父はナザレの村の指物（さしもの）大工であつた。「ナザレより何のよきもの出でんや」と言はれし平凡なる山村が彼の故郷であつた」とあり、キリストの生涯が福音書をもとにわかりやすく説明される。「年三十にして村人イエスは始めて世に出で、福音を宣伝（のたま）へて、天国は近づけり悔改めよ、凡て勞（つか）れたる者又重きを負へる者は我に來れ、我汝等を息（やす）ません、汝等我に従へ、さらば

心に平安を獲（う）べし、我を信ぜよ。さらば救はるを得んと言つた。ナザレの村にて深く旧約聖書を読みし彼は聖言（みことば）の引用に於て自由自在であつた」とし、國中を巡り、「天国の福音を宣伝へ且つ民の中なるもろもろの疾患（わづらひ）をいやした」とする。

続く箇所は、イエスの受難の要約である。「然るに世は彼を受けなかつた。宣教三年にして彼は捕へられ十字架に懸けられた。十字架は所謂磔刑（はりつけ）にして極悪重罪人の処刑である。彼は果して十字架にかけられるべき悪人なりしや。彼と共に十字架に懸けられし盜賊の一人は言つた「我らは為しし事の報を受くるなれば当然なり。されど此の人は何の不善をも為さざりき」と（ルカ伝二三の四）。如何なるキリスト教攻撃者も彼の教訓の崇高にして彼の言行の權威あるを認めざるを得ないのである」との「完全なる人」イエス論を展開する。が、現在はキリスト教の中に「多くの非基督が棲息」するとし、「彼等は基督教を以て自己の思想地位等を裝飾せんとするもの」だと攻撃する。そして「我等は空なるものを求めず実なるものに信頼するが故に、其受くる報償は極めて確実に又極めて大いなのである」で結ばれる。

「第二章 聖書」は、アメリカの費（ファイナンス）府（ステイト）の、三越より十倍もある大百貨店の主人、ジョン・ワナメーカーの逸話から書き起こされる。矢内原忠雄は例話（適用）が実にうまい文章家であつた。ここでの話は、孔子の教を奉ずる日本の実業家の某男爵が、アメリカの日曜学校で「孔子を去りて基督を信ずべき理由を見ない」と演説した時、ジョンは賓客に敬意を払いつつも、「孔子は死して葬られた、基督が來りて孔子よ起てよと呼び給ふまで彼は墓に眠つて居るのである。然るに基督は死にて葬られ三日目に甦（よみがへ）りて神の

右に坐し今尚生きて在し靈を以て現在この室にも臨みて居給ふのである」と言い、ポケットから小型の聖書を取り出して皆に示したというものである。

この例話をひきつつ、忠雄はキリスト教の中心は、道徳や教訓でなく、「十字架と復活の事実」であると言い、「彼以外の誰が我等の為に死に給ひしや、彼以外の誰が我等の為に復活し給ひしや」とその死と復活を高く評価する。「基督教の特徴は十字架の事実に存する」と彼は述べ、「聖書は基督の神性、贖罪、復活、再臨を証する書」と言う。これが本章の骨子である。そのために忠雄はわかりやすく、「旧約聖書二十九卷、新約聖書二十七卷計六十六卷より成る叢書」の意味を説明し、「夫れ旧約とは基督降臨の約束にして新約とは基督再臨の約束である」とまとめる。結びの箇所では「聖書は決して難解の書にあらず」とし、「見よ、主イエス・キリストを中心として輝く首尾一貫せる一幅の活画、読みて厭かず見て倦まず、反復益々新しき智慧を与ふる生命の書」だとする。キリストの十字架と再臨を強調するところ、恩師内村鑑三を思わせるものがある。

「第三章 基督教と西洋」は、キリスト教は西洋の宗教で日本の国体に反するのではないかという問への解答の意味を込めた章である。キリストの一生を送ったのはアジア州の西部パレスチナであったと著者は言い、欧州の伝道に従事したパウロでさえ、その足はイタリアのローマに止まったとも言う。「黙示録」は「アジアにある七つの教会」に送られたもので、その筆は新天新地の創造に終わっている。キリスト教は西洋の宗教、アジアの宗教と限定されるものではないが、歴史的に言うなら、むしろアジアの宗教といわねばな

らぬ。キリスト教は西洋文明に大きな影響を及ぼしたが、キリスト教と西洋とは決して同一ではないとし、以下著者は一つ一つの疑問に答えるのである。

先ず、キリスト教は我国道徳の基礎である孝道に反するという問に対して、果たして孝道に反するのかと反問する。キリスト教の根本は父子の關係に基づく。キリストは父なる神に服従し、死に至るまで十字架の死をさえ受けるまで従った。彼は神に対して無二の孝子であった。「汝の父母を敬え」とは、十戒の一カ条にしてキリストもこれを守るべしと告げられた。「神に従ふ如き孝心を以て両親に従ふべし」とは、神の喜び給う所ではないかと忠雄は書く。

また、西洋は女尊男卑ゆえ、キリスト教は日本の婦道に反するという者がいるが、それは西洋とキリスト教を混同するところから来ると言い、聖書は「妻たる者よ其夫に従ふべしこれ主にある者の為すべき事なり」(コロサイ書三の一八)、「妻たる者よ主に服ふ如く己の夫に服ふべし、蓋キリスト教会の首なる如く夫は妻の首なれば也」(エペソ書五の二三、二三)などあるではないかとも言う。さらに「基督教国には社会主義流行せるを以て我国臣僕の道に反す」という者がいるが、キリスト教は社会主義の信条とは異なるとし、他にもキリスト教は愛国精神がないとか、日本道徳に反するとかいうことどもに、忠雄は理論的に明快に反論する。

「第四章 基督教と教会」以下「第八章 信者の生涯」までが、本書の中核ともいえる箇所である。第三章まででキリスト教に対する世の(限定するなら新居浜の人々の)偏見や疑問に応えた忠雄は、以下、贖罪・復活・再臨というキリスト教の本質に迫る。彼は世の教会の教派性を問題とする。彼は言う。「何ぞ必ずしも宏壯なる会堂

と之を司る監督牧師とを要せんや、我等の家庭に於て、我等の小地方に於て、或は又汽車の中、船の上に於てすら、組合教会にもあらず、メソジスト教会にもあらず主一つ信仰一つバプテスマ一つなる神の教会は成立するのである」と。

ここに内村鑑三を師とする矢内原忠雄の無教会主義の考えがはっきりと示されている。彼は「真正の教会」と「偽りの教会」とを峻別する。彼は「偽りの教会」は、「天にあるものを求めずして地にあるものを求む、地上に於ける一大勢力たらんことが彼等の願望である」と言い、さらに「キリストの恥を身に負ひて營の外に出づるが如きは彼等の最も忌む処である。妥協による膨張が彼等の政策である。彼等は人の権威を怖るる故に罪の悔改を説かず、科学の権威を怖るる故に復活と奇蹟とを述べず、現世の権威を怖るる故に主の再臨を信じない」と厳しく断罪する。

その贖罪論は、聖書に実に忠実である。神は「独子イエスを送りて救の途を人類に提供せられた。彼を信ずるによつて凡ての人は救はる、実に驚くべき計画驚くべき愛と言はざるを得ない。律法は人を死なしめキリストは人を救ふ、律法は「万人を罪の下に拘囚たり、これ信ずる者のイエス・キリストに対する信仰に由れる約束を与へられんが為めなり」(ガラテヤ書三の二三)、悔改めて彼を信ぜざらんば、他に救の途は無いのである」との明言は、聖書にしっかりと立脚しての発言であった。

復活論もまた明快である。彼は「事實は事実にして抹消するを得ない」と言い、「復活は我等の信仰の一大基礎たる事実」とし、「コリントの信徒への手紙 一」の15章16―17を引き、「実に復活なくんば我等の信仰は空しきものとなるのである」とする。さらに「十

字架の下罪に泣きし身も、復活の信仰により勝歌うたひて進む勇者となるのである」と言い切る。

再臨の章は、「死して甦へり天に昇り給ひしキリストは再び此地に臨り給ふのである。我等はその何時の時なるやを知らぬ、時を識るは父なる神のみである」にはじまる。矢内原忠雄は、再臨に関してはよく勉強している。彼は「テサロニケの信徒への手紙 一」の4章16―17を引き、「主の空中まで来り給ふ時既に死せる信者は復活し、生存せる信者は死を経過することなくして栄光の体と化して主に携へ挙げらるるのである」と言い、「千年王国」にも言い及ぶ。その上で①「再臨は信者の完成」であり、②「再臨は信者の幸福の絶頂」であり、③「再臨は此世の完成である」とする。さらに④「再臨は又天地の完成である」と言い、「我等は此再臨を待ち望むのである」と結語する。

最後の「第八章 信者の生涯」は、本書全体のまとめでもある。彼は、人は「運命」を問題とするが、「キリストを信ずるによりて、偶然の運命に代りて愛の神が我等の導者となった」とし、「信仰と愛とは信者の生涯の三綱領である」と言い、この三つは「信者の生涯の経緯である」とする。最後の一文は、「主は近し、我等何事も思ひ煩ふに及ばず、唯事毎に祈禱し懇求をし且つ感謝して己が求むる所を神に告ぐ、さらば神より出でて人の凡て思ふ所に過ぐる平安は我等の心と思とをキリスト・イエスによりて守るのである(『ピリピ書四の四―七』)となつてゐる。

新居浜の住友別子鉱業所に勤務し、仕事を終えた夜の時間を用いて書き継いだ青年矢内原忠雄の最初の著書が、『基督者の生涯』であったことは、記憶に留めたいことである。

- 注1 矢内原忠雄「内村鑑三」社会思想研究会編『わが師を語る』(現代教養文庫)一九五三年二月所収、のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。四八七〜五〇九ページ
- 2 矢内原忠雄「教師としての内村鑑三」『日本聖書雑誌』第5号、一九三〇年五月、『内村鑑三追憶文集』一九三一年三月所収、のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。四四〇〜四四三ページ
- 3 矢内原伊作『矢内原忠雄伝』みすず書房、一九九八年七月二三日。二六四ページ
- 4 矢内原忠雄「私の歩んできた道」東京大学出版会、一九五八年三月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一五〜七五ページ
- 5 矢内原忠雄「新渡戸先生の学問と講義」『書斎の窓』第二〇号、一九五五年二月、『人生と自然』一九六〇年一〇月所収。のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。七一八〜七二四ページ
- 6 矢内原忠雄「十字架を負ふの決心」『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。五七五〜五八一ページ
- 7 注3に同じ。三〇三〜三〇九ページ
- 8 矢内原忠雄「就職に就て」『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。六〇二〜六〇五ページ
- 9 矢内原忠雄「採用試験」『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。六七三〜六八一ページ
- 10 矢内原忠雄「消息 三月十三日 江原兄へ返書」『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。六九一〜六九二ページ
- 11 山下陸奥「新居浜時代のことなど」南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克己・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日。五四ページ
- 12 注3に同じ。三三一ページ
- 13 矢内原忠雄「或る相談」『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。六八二〜六八三ページ
- 14 矢内原忠雄「或る相談の其後」『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。六八五〜六八六ページ
- 15 注3に同じ。三二四ページ
- 16 注3に同じ。三二三ページ
- 17 矢内原忠雄「私は如何にして基督信者となつたか」『通信』18号、一九三四年六月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一四四〜一四五ページ
- 18 黒崎幸吉「式辞」『清き岸べに』嘉信社、一九六二年六月二五日。六〇ページ
- 19 黒崎幸吉「恩恵の回顧」『永遠の生命』第三四九号、一九六〇年一〇月、のち『黒崎幸吉著作集』5、新教出版社、一九七三年六月三〇日収録。三七四〜三七五ページ
- 20 注11に同じ。五四ページ
- 21 松尾逸郎「基督者の信仰」出版のころ」南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克己・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日。五八ページ
- 22 注3に同じ。三三九〜三四〇ページ
- 23 矢内原忠雄「私の伝道生涯」『橄欖』一九五六年六月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一八七ページ
- 24 注23に同じ。一八八ページ
- 25 注21に同じ。五九ページ